

研究ノート

## ある江戸人の異文化理解(四)

Crossing Cultures in the Edo Era.

### さぼたんさい 一七七二～一八二五 <sup>そうぎろう</sup>の総宜楼の詩碑をめぐって

An Examination of Sougiro, a poem written in classical Chinese by Tansai Saba (1772~1825)

新谷 雅樹

SHINYA Masaki

一

すでに本紀要の前号で述べたように<sup>1</sup>、桐生の絹買次商・佐波淡齋(字は蘭卿<sup>あざな</sup>)は、享和元年(1801)、たまたま来桐した遊歴文人の亀田鵬齋の知遇を得、その仲介によって、いわゆる「都下の詩伯」との交流がひらけた。それ以来、江戸・桐生間の詩筒の往来は頻繁だったらしく、淡齋の作詩の技倆は日に日よりすすんでいったようである。「都下の詩伯」とは——市河寛齋、柏木如亭、菊池五山など複数いるものの——狭義には大窪詩仏(字は天民)をさす。淡齋じしん、詩仏を師とあおいだからである<sup>2</sup>。桐生では、二人がつねならぬ師弟関係にあったこと、口碑いまだ湮滅<sup>いんめつ</sup>せず、たとえば昭和十四年におこなわれた「佐波淡齋翁遺蹟顕彰展覧会」の彙報にも、こう特記されているくらいである。

大窪詩仏とは師弟の関係があるが其物質上援助に就いては其記載せるものを知らずされど酒食遊興の費用の如きものにては相当の数字に上るものと思ふ<sup>3</sup>(漢字は現在通行の字体にあらためた。以下同じ)

江戸時代の富商がいまをときめく詩豪の接待費にどれくらい費やしたのか——これは興味ある問題だが、その資料はいまにいたるまで発見されていない。ただ、相手が年に三百両、四百両とかせぎだす「一時の詩豪」(釧雲泉の言)であったから、それは「酒海肴山」<sup>4</sup>と形容するに足る豪勢な設宴であったと想像するほかない。

『詩聖堂詩集二編』(文政十一年刊)塩田随齋序<sup>5</sup>に、

「児童走卒、皆ナ天民先生ノ善詩人<sup>た</sup>ヲ知ル」(原漢文)という。

当時、詩仏の盛名は子どもや走り使いのたぐいまで承知していた。声価万里をゆくがごとし。そういう人気絶頂の詩人の門弟であるのは、たいそう榮譽なことであつたらう。名利名声をしたうのは商人の、い

や、人情のつねである。

兩人は人をそらさぬ如才なさをもちあわせていた。詩仏は諸侯名流のところへ出教授をして多額の指導料をかせいだし、淡齋は淡齋で、奢侈品の絹をあつかう商売柄、権門勢家の接待にたけていた。そういう二人は師弟関係をこえてウマがあったようである。わざわざ桐生から江戸に出てきた淡齋が、師のおともをして金沢八景や箱根蘆の湯に一遊することもあったから、そういうのである。たとえば以下の詩のとおり――

涼気生時雨始収 涼気 生ずる時 雨 始めて収まる  
趁風雲脚去如流 風を趁ひ 雲脚 去りて 流るるが如し  
東南一角山才欽 東南の一角 山 才かに欽く  
展出蒼波万頃秋 展出す 蒼波 万頃の秋

似霧似煙還似雨 霧に似 煙に似 還た雨に似たり  
霏々莫々更紛々 霏々莫々 更に紛々  
須臾風起吹将去 須臾にして風起り 吹きて将ち去る  
去作前山一带雲 去りて 前山一带の雲と作る

いかにも日本漢詩然としたものだが、前者は淡齋の作、後者は詩仏の作である<sup>6</sup>。文化七年(1810)の秋のこと、「寛政の五鬼」の一人であった儒者の山本北山は、佐波淡齋、木百年、糸井君鳳、大窪詩仏、妻の細桃、長子の緑陰、喜田武清、谷文一の八名の雅人をひきつれて、箱根蘆の湯に清遊したことがあるが、そのおりの作である。そのとき一行は「嘉会は詩を寄せて以て親しむ」(鍾嶸『詩品』)で、詩酒の会をもよおして漢詩を作りあった。いずれも箱根の風光美をたたえる頌歌である。一人一首ずつ、あわせて九首――その作詩は他日、記念として碑刻され、いまでも箱根東光庵の敷地内に建っている。当庵はいまでは蘆の湯の松坂屋本店の裏山に旧跡をとどめているにすぎないが、化政期には大磯鳴立庵とならんで、文人墨客がつどう雅集として有名だった。わたしは五年前の夏のさかり、実地に訪れて調査してみたが、碑面はところどころかなり摩滅しているものの、判読に困難というほどでもなかった。碑陰には次のような北山の碑文がきざまれている<sup>7</sup>。

蘆ノ湯ハ<sup>はこね</sup>箱根ノ温泉ナリ。能ク<sup>よ</sup>痼ヲ医シ<sup>よ</sup>廢ヲ起ス。文化庚午ノ秋、佐波蘭卿、木百年、糸井君鳳、大窪天民、吾ガ婦細桃、男謹、喜田武清、谷文一、<sup>とも</sup>同ニ<sup>ここ</sup>斯ニ遊ビ、煙霞泉石ノ凡ナラザル賞愛ス。  
<sup>おのおの</sup>各 詩ヲ作り、以テ其ノ勝ヲ賦ス。蘭卿、謹ト謀リテ、石ヲ立テ之ヲ碑面ニ刻ス。天民書丹シ、更ニ武清、文一、及ビ其ノ師・文晁ヲシテ、<sup>おのおの</sup>各 魁星像ヲ<sup>えが</sup>画カシメ、碑陰ニ刻シ、以テ長ク此ノ山ノ文雅ヲ保護セント云フ。北山山本信有題。慶雲刻。(原漢文)

この碑文を読むと、淡斎は北山の息子・謹（号は緑陰）と相謀って建碑をしたことが知れるが、これはそもそも淡斎の発意によるものと思われる。碑陽にきざまれた、これら九人の詩のうちで、淡斎のものが筆頭をかざっているから、そう思われるのである。一基の詩碑を建てるには相当の資金が必要だが、それはおそらく宏量の絹商が出資したものと思われる。後で詳しく触れるが、留名癖のある淡斎は、立碑にえらく執心したからである。さらに言うと、このときの遊興費も大度の絹商が負担したものと思われる。これも後述するが、淡斎は江戸文人たちの文化的<sup>パトロン</sup>金主の役割を積極的にになった節がある。たとえば渡辺崋山の『毛武遊記』には、「桐生は流遇者、甚だ多し」（原漢文）として、詩人では柏木如亭、市河寛斎、大窪詩仏、糸井君鳳、佐々木雲山（宮沢雲山のことか？）、斎藤天籟、書家では巻菱湖、画家では建部綾足、呉竹沙などの名前をあげているが、これらの「流遇者」たちは一時的に桐生に都落ちし、詩なり書なり画なりを書いて潤筆料をかせいだのち、江戸に舞いもどった。ありていに言えば、彼らは左前になると、下向してお金持ちの淡斎の庇護にすがつたのである。こういう「流遇」を、頼山陽は自嘲的に「旅猿」といい、村瀬栲亭も「田舎わたらい」といった。江戸時代でいうと、総じて彼らは土農工商という割り付けに属さない「遊民」であったと言っていい<sup>9</sup>。

これら旅稼ぎ文人のなかで、もっとも潤筆料をかせぎだしたのは詩仏である。彼は詩癖も旺盛なら、銭癖もおとらず旺盛で、森鷗外の『寿阿弥の手紙』は、その間の消息をよく伝えている。

（詩仏は）文政十年に加賀から大阪へ旅稼ぎに出たと見える。江戸に居ても「一日に一分や一分二朱」は取れるのである。…（略）…此旅行は「都合日数二百日にて、百両ばかり」にはなった。「一日が二分ならし」である。これでは江戸にゐると大差なく、「出かけただけが損」だと云つてある。<sup>10</sup>

江戸の一両が現在の価格のいくらに相当するのか？ これは難しい問題である。いろいろな換算法があるが、たとえば江戸中期の大工の賃金から換算すると、一両＝約三十二万円になるといふ<sup>11</sup>。してみると、詩仏は二百日の旅稼ぎで無慮三千二百万円もの収入をえたことになる。当人はそれでも不平を鳴らしているくらいだから、江戸時代の文人長者番付の筆頭に位する一人だったということになるだろう。世間の耳目をあつめるほど、羽振りをきかせたのも当然の話である。

桐生の高尚醇雅な文雅愛好家で、文化的パトロンをもって任じた淡斎は、商用がてら江戸に出るたびに、まっさきに神田お玉ヶ池の詩聖堂（詩仏の居宅）の門をくぐったのではないか。この住まいは当時評判の豪邸で、儒者の清水礪洲が随筆に、こう書きのこしているほどである。

於玉が池の裡なれども、詩聖堂と云は二階屋にて、上は塾生下は家内の住居なり。於玉が池三四百坪の池にて、蓮を種、柳を植、池のほとりに翠舎屠蘇といふ一室を作り、はき庭の体にて、飛び石伝ひ十五六畳の座敷あり。先生それに住して来客に接し、人のもとめに応じて書画を揮毫す。後に

其脇に唐石軒と云葺却の八畳敷程の一室を造る。これは宋唐の碑本をかけ尽るが為めなり。食客塾生男女十余人、料理人一人あり。日々に推レ鮮割レ薪、来客絶る事なし。其頃は歳入三四百金なりしと云。歌妓など日として来たらざる事なし。<sup>12</sup>

来客、日々絡繹<sup>らくえき</sup>としてたえず、酒宴の座持ちに三味線芸者を日ごと召し出したというし、年収が三四百両というから、まずは栄耀栄華をきわめたと見ていいだろう。このような師のぜいたく好みは弟子の趣味にかなうものではなかったか。山本北山門下の鴻儒・朝川善庵は若いころ、食うや食わずの困窮におちいり、それを見かねた淡齋から毎年二十両の援助を受けていたことがある<sup>13</sup>。その義理から、善庵は淡齋没後に「桐生故詩人佐波淡齋君墓記」<sup>14</sup>を撰したが、そこに「烟花総管」「風月主人」<sup>15</sup>（どちらも花魁衆<sup>バトロ</sup>の檀那という意味）と書かざるをえなかったほど、淡齋はつけびたりに吉原に流連して、お大尽遊びをしたようである。弟子もまた師同様に派手好きだったわけだ。

しかし、幼少のころから文墨を愛した淡齋出府の一番の目的は、やはり自作の添削を乞うこと、そして詩仏の目的はその対価として潤沢な指導料をもらうこと、師弟関係というよりは暗黙の取引関係といったほうが実情に近い。こまかく算盤をはじくことにかけては、詩人の詩仏も商人の淡齋も同類であった。詩仏などは添削料の多寡<sup>ふえつ</sup>によって斧鉞の深淺に差をもうけたというから、桐生の豪商のさしだす上値の謝金に、さぞかしエビス顔で朱筆をふるって、懇切ていねいに指導したにちがいない。それくらい詩仏は銅臭のする詩人だと、当時から評判だった<sup>16</sup>。稀代の諷刺家周滑平<sup>すこつへい</sup>先生などは、滑稽本『妙々奇談』のなかで「詩商人顛民（詩仏の字「天民」のもじり）」<sup>17</sup>とけなしているほどである。（本書は当時の著名文化人である亀田鵬齋、山本北山、谷文晁、大窪詩仏、市河寛齋、市河米庵、菊池五山、中井董堂らを棚卸した評判記の一種で、みながみな手段をえらばずに金もうけに走っていると酷評して、洛陽の紙価を高からしめた滑稽無比の奇書である。巻頭書名は『学者必読妙々奇談後夜の夢』という）。

## 二

ここで話はいささか飛躍するが、北野屋平兵衛こと佐原鞠塙<sup>きくわう</sup>について語ろう。彼は今の墨田区向島に百花園（「新梅屋敷」「花屋敷」とも）を開園したことで今に名をとどめるが、くわしい伝記はわからない<sup>18</sup>。当園門前に建つ東京市碑（向島百花園来由の碑）にいう（ルビ・句読筆者）。

名勝向島百花園ハ文化元年佐原鞠塙ノ開創スル所ニシテ、風流文雅ノ名所トシテ聞ユルコト久シ。鞠塙ハ仙台ノ人。江戸ニ出テテ骨董商ヲ営ミ、北野屋平兵衛ト称ス。性園圃ノ技ニ通シ文墨ノ才ニ富メリ。晩年産ヲ治メ、寺島村多賀氏ノ旧地三千余坪ヲ購ヒテ閑居スルヤ、自ラ鋤鋤ノ勞ヲ執リ、文苑ノ名士<sup>あいはか</sup>ト胥諮リテ梅樹<sup>ならび</sup>並ニ四季百花ノ粹ヲ蒐メ、詩韻豊カナル花圃<sup>かほ</sup>トナス。春夏秋冬

花開カサルナク、東西南北客争ヒテ来タリ、花屋敷、百花園ノ名、普ク世ニ布クニ至レリ。然ルニ、明治以来 屢 出水ノ厄ニ罹リ、園景遂ニ荒廢ニ瀕スルヤ、故小倉常吉氏ハ深ク之ヲ惜シミ、大正ノ初メ、資ヲ投シテ園地ヲ収メ旧景ヲ保存シ、他日公開ノ意図ヲ有セラレシカ、不幸易簧セラレタルヲ以テ、未亡人小倉乃婦刀自ハ其遺志ヲ繼承シ、昭和十三年十月、園地一切ヲ挙ケテ東京市ニ寄附セラレタリ。

本市ハ寄贈者ノ芳志ヲ体スル共ニ、曩ニ昭和八年史蹟名勝天然記念物保存法ニヨリ指定セラレタル本園保存ノ趣旨ニ遵ヒ、銳意之カ復旧ヲ図リ、今ヤ公開ヲ見ルニ際シ、茲ニ其来由ヲ記シ以テ後世ニ伝フ。

昭和十四年七月 東京市

この鞠塲作庭による百花園は、当時、文人墨客のサロンとして利用され、利用者には絵師・酒井抱一、狂歌師・大田南畝、国文学者の加藤千陰、村田春海、漢詩人の市河寛齋、大窪詩仏、菊池五山、亀田鵬齋、そして絹商人の佐波淡齋がいた。抱一は「百花園」の命名者であり、南畝は「花屋敷」という門額を書き、千陰は「お茶きこしめせ/梅干しもそうろうぞ」と掛行灯にしたため、詩仏は「春夏秋冬花不断/東西南北客争来」という対聯を書いて門をかざった。桐生の淡齋もまた五山のおともをして百花園をおとずれたことがあり、「鞠塲の梅園に遊び、五山先生に似す」<sup>19</sup>という五律を作った。鞠塲と淡齋のあいだに交流があったというゆえんである。

百花園開園直前の享和三年(1803)の年、鞠塲は詞華集の『盛音集』<sup>アンソロジー</sup>発刊にむけて編集に余念がなかったと思われる。本集の太田元貞(錦城)の序文「鞠菩薩盛音集序」が同年に書かれていることから、そう推測できるわけである。当の『盛音集』は翌年の文化元年(1804)の夏六月、江戸書林須原屋から刊行。これは江戸の名流百家の各詩を一集にあつめたもので、「俗に遊ぶことによって雅を求めようとする雅俗意識の市隠の徒の総集といっている」<sup>20</sup>。本集に顕著なことはというと——市河寛齋、市河米庵、鉏雲泉、福田竹庵、佐波淡齋、海野螻齋、酒井抱一、柏木如亭、僧雲室、葛西因是、館柳湾、柏木立人、小島梅外、朝川善庵、山本緑陰、山本北山、木百年、大窪詩仏など——江湖詩社の詩人たちと、この一派と脈を通じる文人騷客たちの漢詩が数多くおさめられているということである。それは骨董商として名をなした北野屋と詩壇の大御所の寛齋や詩仏との交際が密だったことによるだろう。寛齋は古玩をすこぶる愛し、『芥園瑣録』『宝月楼古鑑譜』<sup>21</sup>という文房骨董趣味の専著まであるくらいだから、北野屋とは昵懇であった。詩仏はその寛齋の高弟であったから、これまた北野屋と懇意をかさねた間柄であった<sup>22</sup>。

もちろん『盛音集』には、わが淡齋の詩も一首、録せられている。無名の彼の雅号<sup>ペンネーム</sup>が中央詩壇につたわった最初である。その題名は「賦得山重水複疑無路柳暗花明又一村(賦し得たり「山重水複、路無きかと疑う。柳暗花明又た一村」を)」<sup>23</sup>という。詩は以下のごとし——

近水村従花外曙 水に近き村は花外より曙け  
繞山径自柳辺昏 山を繞る径は柳辺より昏る  
羊腸燕尾行過処 羊腸燕尾 行き過ぐる処  
春草茸々染焼痕 春草茸々 焼痕を染む

この題名が「賦得……」うんぬんというのは、「山重水複疑無路、柳暗花明又一村」というところが、そっくりそのまま南宋の陸游の七言律詩「遊山西村」<sup>24</sup>の頷聯であり、この有名な成句を取って題としたので、ことさら「賦得」と冠したのである。「従花外曙」「自柳辺昏」という詩句が「柳暗花明又一村」を典故としていることは言うまでもない。この詩は習作風ながら、淡彩の陸游に対する傾倒ぶりがうかがわれ、悪しき唐詩の模倣から脱して、写実的な宋詩の実作へと転じた転機の一作と見ることができるだろう。おそらく清新平明な宋詩をおもじた江湖詩社の詩人・大窪詩仏などの誘掖によるものだと思われる。この詩などはまだ若書き（当時三十三歳）の部類に属するが、たとえば前号で紹介した淡斎の七絶「田園月夜」<sup>25</sup>などは、いかにも宋詩風の自然観照の詩で、いよいよ写実の冴えをみせている。その進境のいちじるしさを比較してみるために、煩をいとわず、もういちど引用すると――

連枷声裏夜方長 連枷（穀竿）声裏 夜方に長く  
秋老村村打稻忙 秋老けて 村村 稲を打つに忙し  
月満平田冷如水 月は平田に満ちて 冷きこと水の如く  
寒光結作五更霜 寒光 結びて作る 五更の霜

この詩は一読して、南宋の范成大の田園詩<sup>26</sup>を連想させる。これまた煩をいとわず、以下にひく。

新築場泥鏡面平 新築の場泥 鏡面のごとく 平らかなり<sup>27</sup>  
家家打稻趁霜晴 家家 稲を打ち 霜晴を趁ふ  
笑歌声裏輕雷動 笑歌 声裏 輕雷 動く  
一夜連枷響到明 一夜 連枷（穀竿） 響きて明に到る

淡斎は『宋三大家絶句箋解』（一冊 文化九年刊）<sup>28</sup>という注釈書をあらわすほど、「南宋三大家」の詩を耽読したが、陸游、范成大、楊万里の三大家のうち、とりわけ范成大到私淑したようである。范成大的「保守的な性格と穩健端正な詩風」にひかれ、「直接の手本とすることが多かったであろう」とは、掛斐高氏も指摘しているとおりである<sup>29</sup>。淡斎は温厚篤実な人柄だった、と口碑はつたえているが、そのとおりだとすれば、激越な憂国の情をうたう陸游や、新奇をてらう楊万里の詩は、やはりお手本としては敬遠されたのかもしれない。

話を『盛音集』にもどそう。本集の巻末には、「北野屋鞠塙謹識」という以下のごとき小文が付されている。

小人、古書画銅器ヲ販スルヲ以テ諸名賢ノ玉唾ニ接スルコトヲ得タリ。茲ニ各家ノ郢吟ヲ請ヒテ一集ト為シ、之ヲ命ジテ盛音集ト曰フ。開彫シテ世ニ布ク。窃ニ喜ブ、賤名ノ彩翼ニ付スルコトヲ。伏シテ祈ル、恩顧ノ青眼ヲ惜マラザランコトヲ。(原漢文)<sup>30</sup>

万事ソツのない鞠塙のことだから、本集に名を連ねた諸名家と八方美人的に交際したであろうことは想像にかたくない<sup>31</sup>。江戸の著名文人はもとより、桐生の淡斎とも隔意なくつきあったであろう。あるいは『盛音集』に淡斎詩が一首とられたのは、師の詩仏の推挽によるものかもしれない。前出の太田錦城序（享和三年）によれば、「近ちかご口詩仏ニ従テ詩ヲ学ブ」（原漢文）<sup>32</sup>とあるから、鞠塙と淡斎はまさに相弟子となるわけである。また同序によると、「詩仏ノ詩ハ清新繊麗、美ヲ当今ニ専ニス」（原漢文）<sup>33</sup>というから、兩人は駆け出しながらも、師にならって当時流行の清新性霊派の詩作をおこなっていただろう。

ちなみに北野屋の詩はどんなものか。『盛音集』の掉尾をかざるべく巻末にのっているので、こころみに引いてみよう。題名は「薙髮後作二首」<sup>34</sup>という。「鞠菩薩」というもっともらしい別号は、鞠塙の落髮後のものである。どうやら生業の骨董屋から手を引いて（これには賭博まがいの骨董競り市をおこなったかどで所払いの刑を受けた事件が関係している）<sup>35</sup>、寺島村に隠棲するときに、意あつて頭をまるめ、行い澄ましたものらしい。詩は以下のごとし――

其一

卓帽烏衣太称身	早 <small>そう</small> 帽 烏衣 太 <small>はなは</small> だ身 <small>かな</small> に称う
妻孥相見莫相嗔	妻 <small>さいど</small> 孥 相見 <small>いか</small> て相 <small>な</small> 嗔 <small>な</small> ること莫れ
縦酔裏無簪花興	縦 <small>たど</small> へ酔裏 <small>かんざし</small> に 花を 簪 <small>なげ</small> にする興無れども
且作敲門月下人	且 <small>しばら</small> く門を敲く月下の人と作る

其二

卸髮恰逢重九天	髪を卸して 恰 <small>あたか</small> も逢う 重九の天
秋芳園裏酒如泉	秋芳の園裏 酒 泉の如し
従今免被黄花笑	今 <small>よ</small> 従り 黄花に笑 <small>よ</small> わること <small>を</small> 免 <small>な</small> ず
無復霜糸上髻辺	復 <small>ま</small> た霜糸 <small>びん</small> の髻 <small>ま</small> 辺 <small>びん</small> に上る無し

この習作の域を出ない詩にも、漢詩らしい典故はあるが、ここはそれを説く場ではない。夷齋石川淳

の「墨水遊覧」<sup>36</sup>によれば、「盛音集は花屋敷開園の引札の効果をだしてゐる。しかも、骨董屋の旧顧客をそっくり新庭の雅客として抱きこんだことになる。商略図にあたって抜目ない」と書いているが、夷齋先生の言のとおり、本集の開板は百花園開園の宣伝をねらったものである。資料はいまだ見出していないが、おそらく本書上木の際、商才にたけた鞠塙は鳴り物入りで出版記念会をもよおしたにちがいない（会場は「八百善」あたりか）。そのとき、おそらく淡斎も同席して鞠塙の面識をえたものと思われる。ともに算盤高い商人で、無類の梅好きで、詩仏を師としたとあれば、同気相求むところもあったであろう。しかし、このことについては、べつに語る機会もあるだろう。

### 三

「梅遠近をちこちみなんなみ 南すべく北すべく」<sup>37</sup>

これは与謝蕪村の安永六年春の吟。筆を簡潔短切に用いた佳句である。つねに漢籍に親しんでいた蕪村はこの作句にあたって、『蒙求』の「楊朱泣岐」<sup>38</sup>にいう「楊子、遠路ヲ見テ之ニ哭ス。其ノ以テ南スベク、以テ北スベキガ為ナリ」を意識していたと思われる。もともと、これは『淮南子』に載っている戦国時代の思想家（「為我説」を説いたことで有名な楊朱）の逸話であって、その高誘注によると、「其ノ本同ジクシテ末異ナルヲあわれ憫ムナリ」という。とはいえ、この句の作意は「探梅行」であって、わかれ道を見て哭泣したという古代の思索家の深刻さはないと言ってい。これは元来、春の野遊びをうたうものであり、その俳諧味によって「楊朱泣岐」の深意は希薄なものになっているので、そう骨身にこたえて鑑賞するにおよばないだろう。ときあたかも梅のさかり、数ある梅林の名所中で、さて、どこへ梅見にしゃれこもうか。「南すべく北すべく」——これは「遠近」とともに対句の妙をねらったもので、その対称性がこれからの観梅に浮き立つような効果をあげている。しかしこの行樂は、あくまでも「吟行」という雅事を主眼としたものであって、妻子づれの踏青ドクニツクとは趣をことにする。現実の散策行動がそのまま途上での句作活動となり、あるいは積極的に散策体験に身をゆだねることによって句作の契機とするのである。いうなれば、事にしたが随い景に応じて一句ひねるわけだ。（蕪村には文業のほか、画業があった。この探梅行には写生もふくまれていたかもしれない）。

「句作のための散策を吟行と呼ぶが…〈略〉…俳人のこの行動様式は安永・天明期に著しくなり、自然を客体化して鑑賞する態度を伴っていた」<sup>39</sup>

と田中道雄氏はいう。そして、「このような俳壇動向の背景には、漢詩壇における郊行詩の盛行があった」ともいう。

「郊行の俳諧は郊行詩に触発されたものであったが、郊行詩の盛行もまた宝暦（1751～64）以降の新しい現象であった」

田中氏はその例証として当時の別集（個人詩集）、総集（アンソロジー）をつぶさに調べ、驚くほど綿密な一覧表を示しているが、最後の例として、とくに『詩語碎金』をあげているのは面白い。本書は安永七



年(1778)刊、泉要士徳編・石作駒石校、半紙本一冊、全六十一丁という小冊ながら、幕末まで流行した詩語集である。悪くいえばアンチョコに似た便利至極の通俗書であって、漢詩初学者必携の語彙集であったと言っている。前出の周滑平先生などは、菊池五山の『五山堂詩話』にのせられた無名漢詩人たちの作を、「町方にて居て己に従ふ庸医、田舎在所にて詩語碎金・宋詩語にて模擬する、富家の子弟の詩」(傍点筆者)<sup>40</sup>と茶化したほどである。このように『詩語碎金』は滑稽本の揶揄の俎上にのぼるような俗書であったが、しかし、その影響ははかりしれなかった。本書には、いうところの「郊行詩」の例に富むという<sup>41</sup>。幕末まで全国各地に流布したというアンチョコが事実そうであれば、「郊行詩」は江戸中期から後期かけて、漢詩の初心者のはてにいたるまで模作したということになる。けだし、この一例だけをとっても——江戸漢詩における「郊行詩」の盛行は言うもさらなり——<sup>いちれん</sup>一饜の肉を嘗めて<sup>いつかく</sup>一饜の味を知る、ということになるだろう。

ところで、中国古典詩における「郊行詩」は、おそらく宋代以降に盛んに作られるようになった。宋詩はよく日常生活の一齣を詩材にしたからである。そのことはたとえば『宋詩鈔』<sup>42</sup>などの詞華集に徴してみれば明らかである。「郊行」「郊歩」「野行」「村行」「村歩」「郊外」「郊吟」といった詩題が頻出するので、そういうのである。宋詩が鼓吹されたのは江戸後期であるから、文化文政時代の別集、総集にはいやというほど類題を見出すが、諷園派によって唐詩が鼓吹された江戸中期にも、宋詩風の「郊行詩」が作られたということは、このたび初めて知って驚いた。その最も早い例はというと、別集では『新編覆醬集』(石川丈山著、延宝四年刊)、総集では『扶桑千家詩』(古野元軌編、元禄十五年刊)<sup>43</sup>。言うまでもなく、これらの詩作が日本にあるのは、中国伝来の詩書からの影響である。その実作例は——管見のおよぶかぎり——新井白石の『陶情詩集』(延宝<sup>マ</sup>壬戌の年に稿成る)<sup>44</sup>のなかにある。たとえば以下の五言律詩、題名もそのものずばり「郊行」<sup>45</sup>である。

野闊残山断　野闊く　残山断え  
 天長積水浮　天長くして　積水に浮かぶ  
 麦黄難得犢　麦黄にして　犢を得難く  
 江碧只知鷗　江碧にして　只鷗を知る  
 林罅出幽寺　林罅けて　幽寺出で  
 川廻蔵小舟　川廻りて　小舟を蔵す  
 晚来何处笛　晚来　何处の笛ぞ  
 数曲起前洲　数曲　前洲に起る

詩材は宋詩風に似るが、詩体は唐詩風に似る。それは若き白石が、『三体詩』『瀛奎律髓』『聯珠詩格』など、五山の学僧たちがさかんに研究した唐宋詩の総集によって漢詩を学んだ結果だろうか？ それとも白石じしんの詩が「一時の遊戯に出る」ものであって、やれ唐詩の、やれ宋詩のと、やかましく区

別を立てなかったせいだろうか？

「白石の詩才も亦た天縦為り。其の精工は当世に敵無し。一時の遊戯に出づると雖も、以て其の敏警を見るに足る者有り」(『先哲叢談話』)<sup>46</sup>

白石じしんはあくまでも経世家をもって任じ、みずから詩人をもって任じなかったけれども、この『陶情詩集』は朝鮮通信使をも感心させたという。白石二十六歳のときで、自叙伝『折たく柴の記』<sup>47</sup>のなかで、こう述懐する。

廿六の春、ふたたび出てつかふる身となりぬ、ことしの秋、朝鮮の聘使来たり、かの阿比留によりて、平生の詩百首を録して(筆者注、これが『陶情詩集』の自筆稿本である)、三学士の評を乞ひしに、其人を見てのちに序作るべしといふ事にて、九月一日に客館におもむきて、製述官成琬書記官李聃齡、ならびに裨將洪世泰などいふものどもにあひて、詩作りし事などありし、其夜に成琬我詩集に序つくりて、贈りたりき。

当時の朝鮮は日本からみると先進国であった。中華文明の影響をじかに陸つづきで受けていたからである。日本の文人・学者は朝鮮使節の来朝にあたって、江戸においてはもとより、道中の国々においても客館にこれを訪問して、学問上の質問をしたり、書画の揮毫をもとめたり、漢詩の唱和をしたりするのが慣行だった。そういう文化的先進国の使節に自分の詩をみとめられ、その夜のうちに序文まで書いてもらったのだから、若き白石の得意や思うべし。これほどの詩集であるから、もう一首引用する誘惑を禁じえない。ここでは蕪村の「探梅」にあやかって、白石の「尋梅」<sup>48</sup>(七言律詩)を引いておこう。「探梅」「尋梅」も「郊行詩」の一種だからである。

一双蠟屐印溪山	一双の蠟屐 <small>ろうげき</small> 溪山 <small>いん</small> に印す
風底尋香去復還	風底 <small>かおり</small> 香を尋ね 去りて復た還る
絶代高標群卉上	絶代の高標 <small>ぐんき</small> 群卉の上
驚人清気数花間	人を驚かす清気 数花の間
前生自有神仙骨	前生 <small>おの</small> 自ずから有らん 神仙の骨
到死寧為儿女顔	死に到るまで寧ろ儿女の顔を為す
箇是識梅端的处	箇れは是れ梅を識るに端的の处
雪晴千壑月湾湾	雪は晴れ 千壑 月湾湾

いうまでもなく、新井白石は江戸中期の士林第一等の人物である。経国の志は「正徳の治」によって実現し、詩才は『白石詩草』『白石先生余稿』などの別集によって発揮し、学才は『西洋紀聞』『采覧異言』『読史余論』など多くの著作によって結実した。

一般的にいて、江戸中期においては、このように漢詩文は文墨学芸の才ある士分が作るものであったが、なかでも白石が傑出していた。そのことは『先哲叢談』にいうとおりである。このたび「天下の孤本」といわれた『陶情詩集』をよむ機会にめぐまれて、その感をあらたにした次第である。

#### 四

しかし江戸も後期にはいると、漢詩はかならずしも士の専有物ではなくなった<sup>49</sup>。文化文政期にはいると、漢詩は農工商の各層にまで普及して、作詩人口が飛躍的に増大し、大工の棟梁や地方の商人、名主、はては芸者にいたるまで手をそめるようになった。

桐生の豪商にして<sup>アマチュア</sup>業余詩人の佐羽淡齋もその一人である。明和九年三月十日生、文政八年七月四日歿(1772-1825)。名は芳、幼名は安之助、字は蘭卿、号は淡齋、別号は菁莪堂。本家清右衛門道純の次子であったが、分家初代吉右衛門道西の養嗣となり、文化七年(1810)、三十九歳のとき、その家督をついで二代吉右衛門を名のり、生得の商略商才をじゅうにぶんに發揮して佐羽家を上州随一の富豪にした<sup>50</sup>。おさないころから資性聡明、琴棋詩書をたしなんだが、とくに漢詩には耽溺したようで、繁忙をきめた商人でありながら、寸隙をぬすんで「哦吟閑坐」<sup>51</sup>し、かくして江戸詩林に名をつらねた。第一詩集『淡齋百絶』、第二詩集『淡齋百律』、第三詩集『菁莪堂集』がある。文化十年(1813)の夏、師の大窪詩仏は『淡齋百律』に寄せた序文において、二足のわらじを履く弟子について、こう書いている<sup>52</sup>。

桐生ニ佐波淡齋有り。段匹<sup>ひき</sup>ヲ鬻<sup>か</sup>グヲ以テ業ト為ス。余曾テ其ノ家ニ遊ブ。僮僕数百人、買売ノ忙、牒簿ノ煩、<sup>ことごと</sup>尽ク淡齋一人ノ身ニ管ス。他人ヨリ之ヲ觀レバ<sup>ほとん</sup>幾<sup>んど</sup>堪ヘザルガ如シ。而シテ淡齋ハ之ニ処シテ<sup>ひま</sup>綽然<sup>ひら</sup>タリ。少シク間有レバ則チ一室ニ端坐シテ卷ヲ披キテ詩ヲ吟ジ、未ダ嘗テ一日モ其ノ樂シミヲ改メザルナリ。(原漢文)

淡齋は当時の業余詩人としては最も成功した例で、たとえば処女詩集の『淡齋百絶』は七絶を百首あつめたもの、文化六年(1809)の刊にかかる。それにひきかえ、「都下の詩伯」たる江湖詩社の四詩人の『寛齋百絶』『如亭百絶』『詩仏百絶』『五山百絶』が『今四家百絶』<sup>53</sup>として一本におさめられて上梓されたのは文化十三年(1816)のこと——このように師事した「詩伯」に七年もさきがけて『淡齋百絶』が世に出たのは、おそらく富豪の資力にものを言わせて、自費出版に近い形で刊行にこぎつけたからだろう。また『淡齋百律』が文化十年(1813)に梓行されている。これは五律、七律を百首あつめた詩集であるが、律詩は技巧を要する最も難しい詩形で、これを<sup>よ</sup>能くする日本人は少ない。いや、中国人にとっても事情は変わらない。それを百首まで物して出版したのは、異数のことである。四人の「詩伯」には、『寛齋百律』『詩仏百律』『如亭百律』『五山百律』といった著作はないから、異例中の異例と言っている。もちろん「詩伯」たちとて、自分の雅号を冠した『××百律』という別集を世に問う志がなかったわけではあるま

い。ただ、出版の困難な時代に資金ぐりがおぼつかなかったのだろう。『淡齋百律』のみ世におこなわれたのは、これも自費出版という形で梓にのぼせたからだろうと思われる。なぜ、こういう推測がなりたつかというと、国立国会図書館顎軒文庫蔵の『淡齋百絶』にも『淡齋百律』にも、刊行年も記されていないからである。まず万両分限の大商人による私家版だと見てさしつかえない。最後の詩集『菁莪堂集』（桐生市図書館蔵）も同様である。

たとえば「都下の詩伯」の一人である柏木如亭のばあい、若いころ自分の遊里体験をうたった『吉原詞』三十首を作って、江戸文苑の好評を博したものの、なかなか刊行のはこびとはならなかったし、後年、「江戸四家」の一人として名をはせたが、五十七年の生涯で出版できた別集は、『木工集』と『如亭山人集』の二冊にすぎない（有名な『詩本草』は死後、詩友の梁田星巖の尽力によって刊行されたもの）。一流詩人にして、このありさまである。にもかかわらず、地方のアマチュアが五十四年の生涯で三冊も出しているのは、貧しい漂泊詩人の如亭にしてみれば、羨望あるいは嫉妬にあたいしよう。

文化十二年（1815）の夏、如亭は桐生の淡齋宅に寄寓したことがある。折もよし、淡齋は『菁莪堂集』上梓に際して、この居候詩人に巻頭をかざる題詩の揮毫を依頼した。できあがったのは「淡齋詩三編」<sup>54</sup>という百六十八字におよぶ長詩で、四句ごとに換韻されているという手のこんだものである。これは『淡齋三集（＝菁莪堂集）』として、いまでも桐生市立図書館に所蔵されているので、書家としても一流だった如亭の筆跡<sup>55</sup>のまま写刻されている刊本を見ることができる。詩といい書といい、四方八方堅横十文字に馳騁した達文能筆で、まるで綺羅のごとく華麗である。如亭は金銭面ですいぶん厄介になった恩人のために筆をふるったにちがいないし、この最後の詩集をことほぐ題詩の潤筆料も破格のものだったにちがいない。まあ、力こぶを入れるのも当然だろう。寄食中の詩人は修辞のかぎりをつくして大尺の詩をほめちぎった。しかし、『菁莪堂集』はそれまでの拾遺のような別集で、『淡齋百絶』『淡齋百律』のような整序ある体裁をもたない。如亭にしてみれば、歌屑をあつめたような不首尾な個人詩集であった。それゆえにか、生粋の江戸っ子の如亭は、都会人らしい皮肉と詩人らしい巧妙な暗喩<sup>メタファー</sup>をもって、長編のおしまいのほうで、こう詠いこむことも忘れなかった。

可笑家家寒窓婦 笑ふべし 家家 寒窓の婦  
 飛梭<sup>さ</sup>転軸呵凍手 梭を飛ばし 軸を転じて 凍手を呵す  
 花様雖肖璀璨<sup>に</sup>乏 花様 肖たりと雖も 璀璨<sup>さいさん</sup> 乏しく  
 光華富貴落君後 光華 富貴 君の後に落つ

詩中の「富貴」という言葉に着目していただきたい。元来、「富貴は浮雲のごとし」（『論語』）といって、この言葉は貶意をふくむ。だから、ほめ歌にはなじまない語彙である。これはすかんぴん詩人の、お大尺に対する皮肉<sup>アイロニー</sup>ではないのか。如亭は終生、このような「ひねくれた純情」をもてあましていた。如上の詩句の寓意は——自分たち貧乏詩人のつむぎだす詩は、富商のおりだす詩にはおよばない——というも

の。そう謙遜しつつ、自分のパトロン<sup>1</sup>の詩業を旦那芸である、と暗にそう言っているのである。

文化年間に矢継ぎ早に詩集を出した淡斎も、文政年間にはいると、これといった詩は書いていない。彼の詩活動はひととやむのである。それはなぜか、追々のべるが、如亭がほのめかしたとおり、三十代・四十代の淡斎の道楽は、ありあまる資力によって自分の詩集の世に出すことではなかったか。（ちなみに京都では「道楽」という言葉をよい意味で使う由、本稿もその風儀にしたがう。）

## 五

後世に名をのこしたいという佐羽淡斎の留名癖は尋常ではなかった。

江の島のなかに、松尾芭蕉の句碑や服部南郭の詩碑とならんで、わが淡斎の詩碑も建っている。文政五年（1822）九月に、淡斎作の「江島」という七律を巻菱湖が書し、詩仏が次のような題辞を刻した碑である。

淡斎佐波芳、字ハ蘭卿、上毛桐生ノ人。詩ヲ善クシ、嘗テ百絶・百律ヲ著ス。今又タ将ニ遍ク名山奇蹟ニ遊ビ、詩ヲ得テ石ニ刻シ、百碑ヲ立テテ然ル後ニ止マント欲ス。此レ其ノ第一碑ナリ。詩仏老人大窪行、碑陰ニ題シテ以テ其ノ功ヲ督マサント云フ。時文政壬午九月ナリ。（原漢文）<sup>56</sup>

五十路の坂をこした淡斎は、残りの生涯に自分の詩碑を百基、建てようと発起した。この「江の島詩碑」はその第一基である。しかし、文政八年（1825）七月に、その志なかばで病没して、十一基までしか建てられなかった。前出の朝川善庵の「桐生故詩人佐波淡斎君墓記」には、「其所立僅至十一而没」とあるが、たとえば『桐生市史』中巻の「佐波淡斎詩碑表」<sup>57</sup>は十基としている。他の先行研究もみな同数に数える。しかし、実際に判明しているのは九基で、「松島詩碑」が不明であるという<sup>58</sup>。

ところで、中国碑刻史上で最も多くの詩碑を建てたのは、清の乾隆帝である。たんに独裁天子としてのみならず、詩人としての力量を天下全疆に誇示したかったのだろう、名所旧跡にやたらと立碑した。それは一般に「乾隆御製詩碑」と総称される。その数はいくつか？ 中国の学者も「大量にある」<sup>59</sup>と記すだけで、実数は知れないが、おそらく中国全土をさがせば、百碑や二百碑ではきかないだろう。言うまでもなく、乾隆帝は清朝絶頂期の皇帝で、たびたび外征して版図を史上最大のものにした。その巨大な権力と経済力をもってすれば、大量の御製詩碑の建立など困難なことではない。帝じしん、外交内政の繁務のかたわら、約十万余首の詩を作ったが、その数は奉勅撰漢詩集『全唐詩』の収録詩数に匹敵する。それを次第に石にのぼせて碑を建て、あの広大な中国全域に行き渡らせようとしたのだから、勃々たる詩魂もさることながら、想像を絶する皇権である。ともかく史上まれに見る、不世出の文人皇帝であった。

しかし、わが佐波淡斎はけっして絶対君主ではなかった。利に通じる地方の紳商の一人にすぎない。むかしの上州の俚諺に「一佐波、二加部、三鈴木」<sup>60</sup>とあって、上州随一の富豪として喧伝されたくらい

だから、大判小判なら蔵の中に入るほどある。乾隆帝とくらべるのも気がさすが、わが淡斎は豪商とはいえ、せいぜい「数百人の僮僕」をかかえる上州三大尽の一人にすぎなかった。生涯で作った詩も、三百首に満たない。それが百碑建立をくわだてたのだという。さすがの中華にも、一個人がこういう気宇遠大な志をいだいたという例はない。にわかには信じがたい話である。わが淡斎以上に財力にとみ、詩才にめぐまれ、留名癖のつよい商人なら、唐土には佃煮にするほどいた。それなのに、一人として百詩百碑の建立をめざしたものはいないのである。

しかし、向島白髭神社境内に建つ「墨田三絶碑」(文政五年の冬に建立。篆額を巻菱湖が、淡斎の七絶三首を詩仏が書し、碑陰には亀田鵬斎の碑文が刻されている。広群鶴弁・男群亀刻)の鵬斎の題文によると、

「上陽ノ佐波淡斎、勝情有リ。是ヲ以テ寰区名勝靈蹟、遍ク探ネザルハナシ。其ノ題セシ詩ハ凡ソ一百所、皆ナ次第ニシテ之ヲ石ニ勒ス」(原漢文)

とあるから、まんざら根無し言ではあるまい。淡斎は元来、山泉の騷客で、山獄江川、古跡名勝を跋涉した。のみならず各所各所で詩を題して、それが百首にもものぼった。しかのみならず百首をのこらず、しだいに石に刻して碑を立てようというのである。また前出の善庵の「墓記」によると、

「又名山勝地、所到輒立詩碑。毎謂人曰、吾一生之間、必当立百碑以存遊踪矣」<sup>61</sup>

淡斎じしん、つねづね人に対して、「生涯かけて、きっと百碑を立ててみせますぞ」と公言していたという。文末の「矣」は古典中国語で、強い決意をしめす語気助詞。全国各地に自詩を石刻した碑を建てることによって、みずから歴遊した来踪去跡を後世に伝えようとした点においては、かの乾隆帝の発想と径庭はない。まさかとは思うが、淡斎は海彼から件の「乾隆帝御製詩碑」の情報を知るにおよんで、同じような夢にとりつかれたのではあるまいか？ しかし、本人は真面目も真面目、この一大壮図は肚底にたくましく育っていた。後世のわれわれから見ると、余身求名のためとはいえ、すさまじい執念である。

それにしても、いったい百碑を建てるのに、どれくらいの費用がかかるのか？ 門外漢には想像もつかないことだが、莫大な金額にのぼることは確かである。ものはためしと墓づくりの相場をインターネットで調べてみた(「まごころお墓.com」)。すると、その全国平均相場は一基200～220万円だそうである。これに100をかけると、なんと20～22億万円に達する。あの百詩百碑の件は、「おのれにできぬことはない」という増上慢から出た大言壮語ではなからうか、という疑いをさしはさみたくもなる。

しかし、菊池五山は『淡斎百律』の叙において、「昇平二百年、海内侈靡、貨物ノ售、歳ニ幾千億ヲ下ラズ、素封已ニ堅シ」(原漢文)<sup>62</sup>というくらいだから、現在の数十億円にあたる蓄蔵はあったものと見える。石材にいくら、石工にいくら、運搬にいくら、用地にいくら、建設にいくら、撰碑銭にいくら、管理維持にいくら等々、利け者の商人の算盤にくるいはなかったであろう。

あとは時間だけの問題である。

そもそも、この晩年の発起じたいに無理があった。文政五年の一年間に、詩仏の「画竹碑」(向島百花園所在。淡斎の題詩が刻されている)、「江の島詩碑」、「墨田三絶碑」、「金沢総宜楼詩碑」、「日光山

詩碑」という五基を、無二無三に打ち建てているが、大金持ちの道楽にしても、常軌を逸している。古い先の長くないのを自覚したためか、大車輪で先を急いだようである。一年に五基ずつ建ていっても、二十年はかかるからである。

しかし、おいしいかな、この三年後の文政八年に他界。前出の「墓記」には「文政乙酉七月四日、以病卒、年五十四」とあるだけで、どういう病にかかって死んだかまでは分からない。寿命とはいえ、さぞかし無念であったろう。なきがらは桐生市本町の浄運寺にほうむられ、戒名は「幽誉指月淡斎居士」。院号がないのは、商人の分にやすんじたためだという。

その後、佐羽淡斎の名は急速に忘れられてゆく。淡斎没後の天保二年(1831)の冬に、桐生をおとずれた渡辺崋山は、詩仏、如亭の名は知っていても、淡斎の名は知らなかった<sup>63</sup>。没後六年しか経っていないのに、である。小倉山上にあった淡斎の別荘は「十山亭」といい、郷中第一の勝概の地にあつて、文化年間には、中央や地元の文人墨客がつどって雅会をもよしたところだったが、それも見る影もないほど荒れすさんでいたという。

しかし彼の名を、このまま忘却の淵にしずめたままでもいいだろうか。次号では前号の主題にたちかえつて、「神奈川眺望」「金沢道中」そして「題金沢総宜楼」の七律をめぐって論じ、淡斎の異文化理解のありようについて考えをふかめてゆきたい。三首とも江戸時代中・後期に流行した所謂「郊行詩」の一種であつて、これらの漢詩をとおして見れば、江戸時代の異文化理解全般についての糸口を発見できるかもしれないからである。

## 【注】

<sup>1</sup>『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』第4号(神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要編集委員会編 2015年)p.50-79

<sup>2</sup>後学位岳侠禅(田村位岳)の「淡斎先生」という詩に「夙ニ詩仏ヲ師トシテ、詩禅(梁川星巖)ヲ友トス(原漢文)とある。(『佐波淡斎翁遺績顕彰展覧会彙報』[桐生市図書館 昭和十四年]p.23)

<sup>3</sup>田村位岳著「詩人佐波淡斎」(『佐波淡斎翁遺績顕彰展覧会彙報』[桐生市図書館 昭和十四年]p.5)所収。

<sup>4</sup>柏木如亭著・揖斐高校注『詩本草』(岩波書店 2006年)p.180。

<sup>5</sup>大窪詩仏著『詩聖堂詩集二編』(富士川英郎ほか編『詩集日本漢詩』巻八[汲古書院 昭和六十年]p.437)所収。

<sup>6</sup>淡斎の作は「蘆湯」として『菁莪堂集』(文化十二年刊 桐生市図書館蔵)の第十五丁目に所収。詩仏の作は彼の詩集に見出せないが、ただ、このときの作として、『詩仏百絶』(文化十三年刊)に、「庚午六月念七緑陰誘予及百年文一遊管根温泉早發高輪作」という七絶がおさめられている。詩は以下のごとし。「乱鳥啼徹潮煙散、淡々輕風露氣繁、第一行人眼明処、蒼波万頃浴紅暎」——『詩仏百絶』(富士川英郎他編『詞華集日本漢詩』第十一巻所収『今四家絶句』[汲古書院 昭和五十八年]p.2)所収。

<sup>7</sup>柴田光彦著「北山門下詩碑と幻の魁星像」(神保五彌編『江戸文学研究』[新典社 1993年 pp.601-615)所収。

<sup>8</sup>渡辺崋山著『毛武遊記録』(崋山会編『崋山全集』第二巻[崋山会 大正三年]p.108)所収。

- <sup>9</sup>江戸時代の遊民については、守本順一郎著『徳川時代の遊民論』（未来社 1985年）参照。
- <sup>10</sup>森鷗外著『寿阿弥の手紙』（『鷗外歴史文学集』第四卷〔岩波書店 2001年〕p.212-214）所収。
- <sup>11</sup>『江戸時代の一両は今のいくら？——昔の貨幣の現在価値——』（日本銀行金融研究所貨幣博物館のpdf 2008年 p.1）。
- <sup>12</sup>清水礮洲著『ありやなしや』（森銚三編『続日本随筆大成』吉川弘文館 昭和五十五年 p.293）所収。
- <sup>13</sup>注8のp.129に、  
「朝川善庵始下帷……以儒自供貧、不可食、淡齋以友義年贈以二十金扶之、故及其死請銘之云、然其情義不可不記、而否、為可恨矣」（訓点略）とある。
- <sup>14</sup>朝川善庵撰「桐生故詩人佐波淡齋君墓記」（国立国会図書館近代デジタルライブラリー収蔵『淡齋百律』〔発行者・佐波喜六 印刷者・曲田成〕第一、二丁目）所収。
- <sup>15</sup>同じ言葉が鶯湖烟水散人著『女才子書』（春風文芸出版社 1983年 p.2）の序に見える。この清初の煙粉小説が江戸時代に我が国に舶載されていたことについては、磯部彰著「関于日本江戸時期諸藩及個人文庫煙粉小説的収蔵情況」（中国社会科学院文学研究所中国古代小説研究中心編『中国古代小説研究』〔人民文学出版社 2010年〕pp.262-263）所収。朝川善庵はこの小説を読んでいた可能性がある。
- <sup>16</sup>注10に同じ。
- <sup>17</sup>周滑平著『妙々奇談』（『日本随筆大成』第三期第十一卷〔吉川弘文館 昭和五十二年〕p.378）所収。
- <sup>18</sup>鞠塙の伝記については、以下のものがある。  
十方庵敬順の『遊歴雜記』「寺島本町新梅屋敷」（江戸叢書刊行会編『江戸叢書』巻の五〔江戸叢書刊行会 大正五年〕pp.35-39）所収。  
東京市編『東京市史稿 遊園篇第二』「花屋敷開園」（東京市役所 昭和四年 pp.771-796）所収。  
関根只誠著『名人忌辰録』「梅屋鞠塙 平兵衛」（六合館 明治二十七年 p.110）所収。  
加藤郁也著『江戸の風流人・続』「佐原鞠塙」（小沢書店 昭和五十八年 pp.108-125）所収。  
鶴ヶ谷真一著『古人の風貌』「風雅と商才」（白水社 2004年 pp.121-156）所収。  
なお百花園については、前島康彦著『向島百花園』（郷学舎 1978年）。
- <sup>19</sup>佐波淡齋著『淡齋百律』（文化十年刊 国立国会図書館鶯軒文庫蔵 第二十三丁目）
- <sup>20</sup>佐原鞠塙編『盛音集』（富士川英郎ほか編『詞華集日本漢詩』第十卷〔汲古書院 昭和五十九年〕p.20-22）所収。
- <sup>21</sup>市河三陽編『寛齋先生余稿』（遊徳園 大正十四年）所収。
- <sup>22</sup>佐原鞠塙編『盛音集』に、大窪詩仏作の「同鞠道人舟中聴虫」という詩が収められている。注20のp.441。詩は以下のごとし。「如訴如悲各自鳴、閑人却聴耳偏清、舟離草岸漸將遠、種々声為一種声」また百花園内には有名な詩仏の「画竹碑」が立つ。揖斐高著「化政期詩人の地方と中央」（『江戸詩歌論』〔汲古書院 1988年 p.209〕所収）によると——  
「文政五年五月、碑の表に詩仏の画竹と淡齋自身の題詩を刻し、碑陰に朝川善庵撰（巻菱湖書）の「詩仏老人碑竹記」を刻した碑を某所に建てた。これはのちに某所より移され、現在は向島百花園内に建てられている」  
付言すると、西村文則の『佐波淡齋と其詩碑（四）』（『東洋趣味』〔東洋趣味社 昭和十二年十一月 p.6〕所収）は、この画竹碑の処置をめぐる詩仏の佐原鞠塙宛の書簡を紹介しているが、五代目園主の鞠塙が口ずから、「此碑は私の初代が詩仏先生から貰うけたもの」と証言したという。  
碑陽には「雲潭作石」とあるが、雲潭がどういう石工であったか分からない。東京都公園協会編『江戸の花屋敷』では、鐫刻を鐫木雲潭としているが、この鐫木雲潭は市河寛齋の次男で、画家である。鐫刻を能くしたとは聞かない。おそらく「雲潭作石」という落款を読みあやまったものだろう。
- <sup>23</sup>注20のp.404。
- <sup>24</sup>『劔南詩稿』巻一。一海知義注『陸游』（岩波書店 昭和三十七年 p.8-9）。
- <sup>25</sup>注1に同じ。
- <sup>26</sup>范成大著『四時田園雜興』六十首「秋日田園雜興」其八——長沢規矩也編『和刻本漢詩集成』第15輯（汲古書院 平成四年 第六丁目）所収『范石湖田園雜興』（晚晴堂刊本 享和三年）
- <sup>27</sup>「場泥」とは分からない言葉だが、穀竿を打つ脱穀場の地面のことであろう。陸游「秋晚」『劔南詩稿』巻三十「新築場如鏡面平、家家歡喜賀秋成」を参考にして訓読してみた。



<sup>28</sup>佐波淡斎著、宮沢雲山校、大窪詩仏序。桐生市立図書館蔵。

<sup>29</sup>揖斐高著「化政期詩人の地方と中央」(『江戸詩歌論』汲古書院 1998年 p.312)所収。

<sup>30</sup>注 20 の p.411。

<sup>31</sup>関根只誠著『名人忌辰録』(六合館 明治二十七年 p.110)の「梅屋鞠塙 平兵衛」によると——  
「本姓佐原氏。向島百花園の開起人なり。天保二卯年八月廿九日歿す。歳七十。浅草阿部川称念寺塔頭観名寺に葬る。(鞠塙は仙台の人。平八とて若年にして江戸に来たり。堺町芝居茶屋和泉屋勘十郎の雇人となり、平蔵と改む。貯財して享和初年住吉町に骨董店を開き、北野屋平兵衛と改称し、諸大家に立ち入り、大に利潤を得て長谷川町に転居す。日々茶人文墨の名家つどひて益益賑はへり。文化七年一会を催し、道具市せり売りと名付く。博奕に紛敷とて忽ち御咎をうけ、所払の刑を申付らる。依て家を子に譲り、其の身は菊屋卯兵衛と改め、中の郷にひそみ、菊卯といへり。翌年秋、剃髪して鞠塙と名乗り、同九年、諸先生の恵により、寺島村の田地を二千余坪買求めて開拓し、広庭とせり。諸大家より梅樹を三百六十本恵まれ、外に秋草を添へて園地とせり。是を百花園とも新梅屋敷とも云ふ。五代目白猿、芭蕉の句をもじりて戯れに『山師来て何やら栽ふし隅田川』(句詠筆者)。

これによると、百花園開園は「文化九年」ということであり、また『東京市史稿 遊園篇第二』p.771の「花屋敷開園」によると「文化二年」ということである。東京市碑の「文化元年」と齟齬をきたすが、いまは東京市碑にしたがっておく。

また鶴ヶ谷真一著『古人の風貌』「風雅と商才」(白水社 二〇〇四 pp.121-156)によると、『遊歴雑記』の著者・十方庵敬順は百花園の美はたたえたものの、鞠塙という御仁をきらったようである。

「敬順は『幫間たいこまちにして更に雅人にあらず』、『甘塩のサンマ』などとききおろしている。ほど近い本所で生れ、茶人としてもひとかどであったらしい敬順は、商才にたけた鞠塙の噂をなにかと耳にしていたのかもしれない。五代目市川団十郎は、鞠塙のことを、「山師来てなにやら栽ふし隅田川」と詠んだ。これは冒頭の芭蕉のもじりだが、親しみをこめてではあれ、鞠塙を山師と呼んでいる。世知にたけた機略縦横の人物は、ときに風流をはみだして、やや俗臭をおびるきらいがあっただろう。

<sup>32</sup>注 20 の p.396。

<sup>33</sup>同上。

<sup>34</sup>注 20 の p.411。

<sup>35</sup>注 31 に同じ。

<sup>36</sup>『江戸文学掌記』(新潮社 昭和五十五年 p.59-67)所収。

<sup>37</sup>尾形功校注『蕪村句集』(岩波書店 1989年 p.17)。

<sup>38</sup>早川光三郎著『蒙求』上(明治書院 昭和四十八年 p.201)「淮南子曰、楊子見遼路而哭之。為其可以南可以北……高誘曰、憫其本同而未異」

<sup>39</sup>田中道雄著「郊外散策の流行——新しい場としての自然——」『蕉風復興運動と蕪村』(岩波書店 2000年 p.67-101) 所収。

<sup>40</sup>注 17 の p.367。

<sup>41</sup>注 38 に同じ。

<sup>42</sup>清・呉之振選『宋詩鈔』(中華書局 1986年)

<sup>43</sup>注 39 に同じ。

<sup>44</sup>紫陽会編著『新井白石『陶情詩集』の研究』(汲古書院 平成二十四年)

じつは延宝という時代には壬戌という干支はないが、自筆稿本末尾の「延宝壬戌秋白石旧隠新井耕父稿」とあるによる。その経緯については本書の p.596。

<sup>45</sup>前掲書 p.341-346。

<sup>46</sup>源了円著『先哲叢談』(平凡社 1994年 p.247)

<sup>47</sup>新井白石著『折りたく柴の記』巻上(岩波書店 昭和十四年 pp.59-60)

<sup>48</sup>注 44 の p.223-229。

<sup>49</sup>富士川英郎著『江戸後期の詩人たち』(平凡社 2012年)参照。

<sup>50</sup>佐羽秀夫氏談『桐生の歴史を語る——佐波秀夫・卓話集』(桐生南ロータリークラブ「桐生の歴史を聞く会」平成二十二年 p.32 の「佐波家家系図」)参照。桐生市史編纂委員会『桐生市史』中巻(桐生市史刊行委員会 昭和三十四年)pp.118-213。また注 29 の pp.292-294。

<sup>51</sup>「初秋夜坐」注 19 の第五丁目。

<sup>52</sup>注 19 の第一～五丁目。

<sup>53</sup>富士川英郎他編『詞華集日本漢詩』第十一卷(汲古書院 昭和五十九年 pp.5-37)所収。

<sup>54</sup>柏木如亭著『如亭山人遺稿』(『新日本文学大系 64』岩波書店 1997年 pp.127-129)所収。

<sup>55</sup>神田喜一郎ほか監修『書道全集』第二十三巻「日本江戸Ⅱ」(平凡社 昭和三十二年 50頁)に柏木如亭の「題詩」七絶二首の書が収録されている。

<sup>56</sup>服部清道著『江の島金石誌』(出版年、出版社不明)pp.97-99。

<sup>57</sup>桐生市史編纂委員会編『桐生市史』中巻(桐生市史刊行委員会 昭和三十四年)pp.203-204。

<sup>58</sup>小林一好著『佐波淡斎』『上毛書家列伝』上(みやま文庫 昭和五十九年 pp.84-107)所収。

これによると、淡斎の建てた詩碑は①蘆の湯詩碑(文化七年)、②向島百花園詩碑(文政五年)、③江の島詩碑(同)、④墨田三絶碑(同)、⑤金沢詩碑(同)、⑥日光山詩碑(同)、不明。⑦伊香保温泉詩碑(文政六年)⑧神奈川詩碑(同)⑨十山亭詩碑(文政七年)⑩松島詩碑(?)、不明。

また淡斎の詩碑については、西村文則著『佐波淡斎と其詩碑(一)～(五)』(『東洋趣味』昭十二年八月、九月、十月、十一月、昭和十三年一月)

<sup>59</sup>毛遠明著『碑刻文献通論』(中華書局出版 2009年 p.227)

<sup>60</sup>田村位岳著「詩人佐波淡斎」『佐波淡斎翁遺蹟顕彰展覧会彙報』(桐生市図書館 昭和十四年 p.1)所収。

<sup>61</sup>注 8 の p.129 によると、

「秋香佐波吉右衛門佐波清右衛門支家也。其父名芳、字蘭卿、号淡斎、一号菁莪堂、善詩詩仏如亭之陶冶著有淡斎百絶一卷行于世、晩年欲建自詩之碑百基於名山、絵島小倉上ノ州等凡十一碑成矣、為其人和怡、嬌奢節儉相半、能恤郷貧民、故家道不衰、朝川善庵銘其墓言其生平能尽、墓在郷之……」(訓点略)

<sup>62</sup>注の 19 の第二丁目。

<sup>63</sup>注 10 の p.9。

「十五日 晴

昼前人々を訪ふ。昨玉上甚左衛門訪ひしに、十山亭碑を見ず、これは小倉山といふ山上に此地の詩人佐波淡斎なるもの所作の詩碑なり。書は此玉上甚左衛門顔魯公の集字して書せしなり。淡斎が伝は後に記す」(傍点筆者)とある。

#### 【付記一】

桐生市立図書館には佐波淡斎の貴重な資料が多く所蔵されている。たとえば淡斎著または編にかかると『惜花帖』『菁莪堂集』『桐郷風雅集』『桐生才子詩』『宋三大家絶句箋解』『宋四霊詩鈔』など、本館でしか閲覧できない稀観書が郷土の宝物として厳重に保管されている。そのコピーをこころよく許可してくださった本館の大瀬裕太氏には、衷心から謝辞を申し上げる。

#### 【付記二】

桐生市の浄運寺には佐波淡斎のお墓と朝川善庵撰「桐生故詩人佐波淡斎君墓記」が建っている。その調査に行ったおり、当寺のご住職がわざわざ庫堂から取り出してきて、佐羽秀夫氏談『桐生の歴史を語る——佐波秀夫・卓話集』(桐生南ロータリークラブ「桐生の歴史を聞く会」平成二十二年)という冊子を恵贈された。ご住職(お名前を聞くのを忘れたが)に対して、心からお礼申し上げる。

#### 【付記三】

「佐羽淡斎」の姓は、日本漢詩研究者のなかで、「さわ」と読む人もあり、「さば」と読む人もある。国会図書館の OPAC は「サワ」とする。しかし桐生では、淡斎の現存のご子孫を「本町の佐羽<sup>さば</sup>さん」と

---

呼んでいるし、また桐生市立図書館の OPAC も「さば」と記しているので、本稿も地元のならわしにした  
がうことにする。

【本紀要第2号正誤表】

154 頁 30 行目「周骨平」→「周滑平」

163 頁注 44 「周骨平」→「周滑平」

【本紀要第4号正誤表】

60 頁 22 行目「太平」→「泰平」

62 頁 30 行目「貴族や士大夫階級」→「士大夫階級」

62 頁 25 行目「周骨平」→「周滑平」

63 頁 14 行目「曰う」→「曰ふ」。「云う」→「云ふ」

77 頁注 16 「周骨平」→「周滑平」